# 第Ⅲ章　遺構の検討

## 第１節　馬池と中世の灌漑用水路

馬池は大和川開鑿をさかのぼる中世から存在していた。最初の築堤時を限定することはできないが、今回、馬池北堤を発掘し(位置は近世の西口樋の東側、00－29次)、その下層の中世灌漑用水路と樋口の廃止が、15世紀中葉頃であることがわかった。それ以前から馬池は、北方に給水していたのである。

第Ⅱ章で述べたようにまず樋口を土砂で閉塞し、水路はおもに地山土を掘崩すことによって埋め、かさ上げして水田化した。江戸時代に北堤を横断するように掘られた水路SD202は満水時の放水路(常用洪水吐)である可能性もあるが、水路底の標高がTP＋10.6mであるのに対して、中世の水路SD301底の標高は、樋口部分でTP＋8.0mであるなど非常に低く、地山を深く掘下げるなどの地業を伴っている。中世の馬池灌漑用水の性格を考えてみた。

### １)中世の灌漑用水路の復元

馬池東堤の調査(99－42・43次)[大阪市文化財協会2003]から中世の堤の状況を復元すると、池底でTP＋9.8～10.5m、堤の天端でTP＋11.7m以上であった。北堤では中世樋口の横の地山高所でTP＋11.3mであり、樋口閉塞と一連の地業と思われるⅥ期で築造された堤の最高所はTP＋12.1mで、東堤よりもやや高いが、同時期の可能性がある。廃止直前の馬池堤の標高がTP＋13.3m前後であるのに比して、中世の堤は簡単な造作

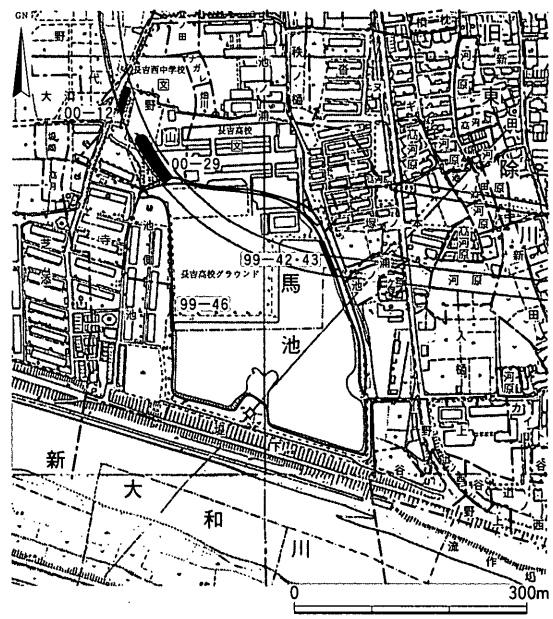


図44　馬池と調査地点

であったといえる。東堤中世堤の築造が、SD301開鑿時なのか、廃止後Ⅵ期なのかはにわかに判断できないが、SD301を閉塞したSF301天端の低所がTP＋10.1mで、当時の馬池の水位がそれ以下と想像されるから、SD301は東堤築堤より一段階古い時期の水路と思われる。加えて、SD301の樋口部分底のTP＋8.0mは、中世馬池の北端の池底標高を示すと思われるから、馬池内に谷筋がはしっていたとみて誤りなかろう。

また今回検出のSD301の北端はTP＋7.5mで、北方の喜連東遺跡の瓜破台地上の地山高がTP＋7.8m前後あり、台地上への用水供給は無理であるから、馬池谷に沿った低地および喜連村と平野郷の低地方面への給水と考えられる。ただ96－71次調査[大阪市文化財協会2001a](図45)で明らかになったように、馬池谷は8世紀末の洪水層である長原5層の堆積で埋積し、台地部の標高とほとんど変らない平坦な状態になっている。長原3層段階では地表面はTP＋9.2mほどであるから、この水路はやはり遠隔の低地への配水の可能性が高いと思われる。

さて馬池とSD301の結節点である樋口の構造はどのようであったのか。大阪狭山市の狭山池は古代から近代にいたる樋の構造を見るには好個の資料である[大阪府立狭山池博物館

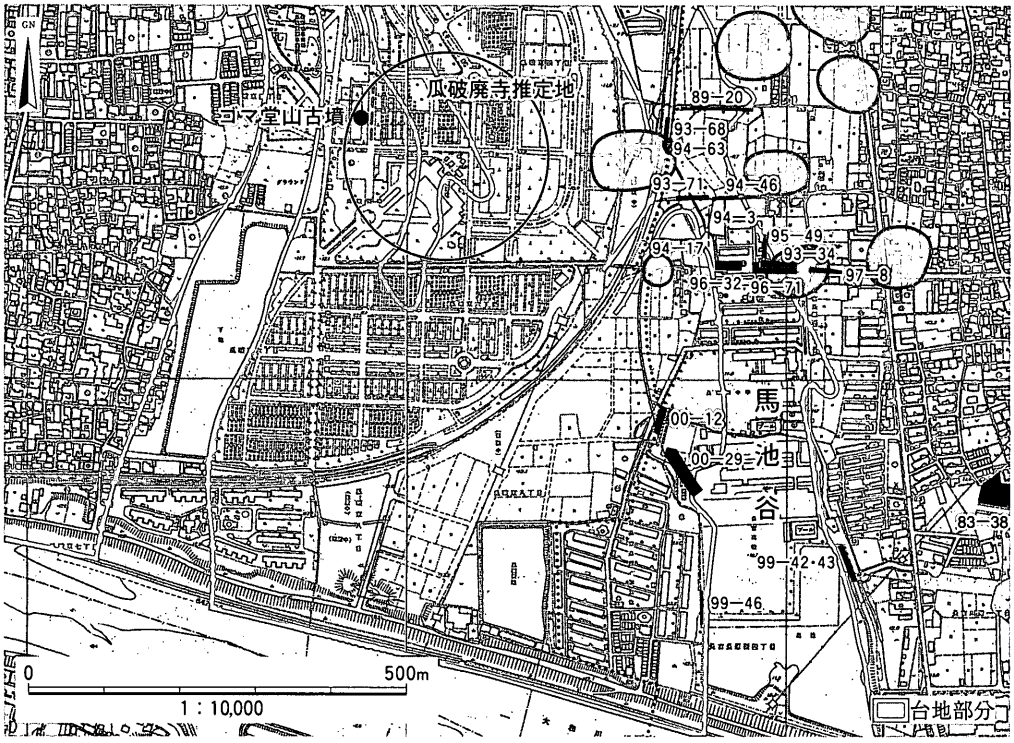


図45　馬池谷復元図([大阪市文化財協会2002]図2に加筆)

2001]。しかし幅20m以上の堤の地下に長さ数十mの木製樋管を横断させ、水温の高い上部水を供給するために四段構造をもつ尺八樋を設けた[大阪狭山市教育委員会1994]狭山池と、堤の幅数mで地山を素掘りしただけの樋口をもつ中世馬池では、比較にならないのも事実である。馬池の樋口は水路をせき止める堰に近い構造であったと思われる。

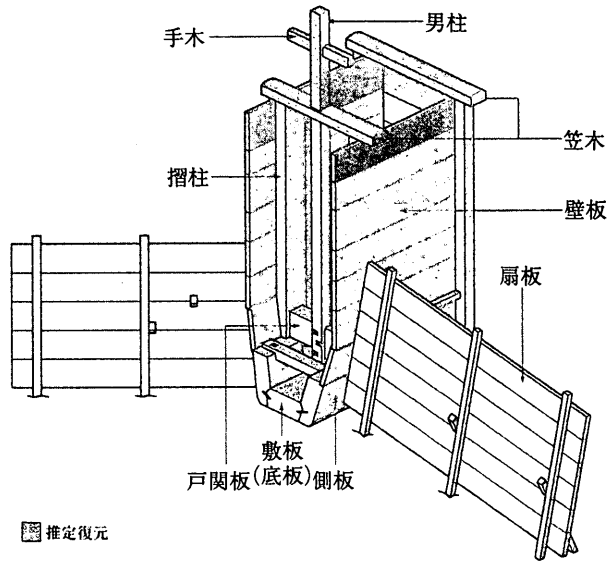


図46　慶長13(1608)年製造、狭山池東樋復元図
([大阪府立狭山池博物館2001]に加筆)

次節で石原佳子氏が詳しく紹介するが、元禄9(1696)年に王水からの取水のため、川辺村と若林村が取り交した証文「為取替申立合戸関樋一札之事」の内に、「砂関」と「戸関(樋)」が見える。おそらく砂関は土嚢袋に砂を詰めて流れをせき止めただけのもので、戸関は狭山池の近世東樋[狭山池調査事務所1995]とも共通する、中央に男柱があり、手動で戸関板を上下させて放水を調整できる樋口であったであろう。

今回の調査は池内の取水部ではなく、池外の排水部の発掘であったから馬池の樋口の構造を明らかにできなかったが、砂関・戸関の両方の可能性を考慮すべきと思われる。

## 2)中世の灌漑用水路の廃止

馬池の東の台地部には東除川が大和川付替え(1704年)まで流れていた。東除川は西除川と並んで、狭山池からの灌漑用水路の役割を負ったが、当初、古代においては古市大溝を水源にしていたという説もある[原秀禎1977]。長吉川辺1丁目の調査(83−38次)で東除川本流を発掘し、第1期(8～10世紀)は幅8m、深さ2.5～3m、第2期(11～14世紀)は幅23m以上、深さ1.4～1.7m、第3期(15～18世紀初頭)幅40m以上の規模であったとしている。地山高所の標高はTP+11.1mである[大阪市文化財協会1983]。馬池北堤の地山高所でTP+11.2mであるからほとんど高低差は見られない。東除川から馬池への引水も考慮すべきであろう。

SD301は平野郷や喜連村などの低地部への給水を考えるべきだろう。何故水路を廃止し

たかは、第3c層の水田開発を理由とするには、その得られる水田面積からして根拠が薄い。水田はあくまで水路埋没後の土地利用という副次的事象として考えるべきである。

一つ水路廃止で考えられることは、15世紀中葉という時代相である。戦国時代の幕開けである応仁の乱は1467年に始まり、室町幕府管領を務めた畠山政長は平野区加美にあった河内正覚寺城で、明応２(1493)年、細川政元らに攻められて自刃する。すなわち当地、河内国丹北郡付近も中央の政争に巻込まれた可能性が大なのである。平野郷周辺は摂津・河内の政治・経済的要衝であるから、敵方の灌漑体系の破壊という挙動は予想される。一つの可能性として提示しておきたい。